

気候と農作物：スクラップブックより

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長島, 昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025676

気 候 と 農 作 物

——スクラップブックより——

長 島 昭*

は じ め に

今年の春は野菜が非常に高値で、キャベツ1箇小売り値で500円もした日もあった。また、5月には静岡市付近の茶摘み直前の山地の茶園にヒョウが降り、多大な損害を与え、7月の初めには肌寒く、しかも梅雨も長く、梅雨が終ってしばらくは暑かったが、8月に入ると東北からは冷害の報が届いて、昨年9月の異常残暑以来気候がどうもおかしいようである。そこでスクラップブックを見返して最近の異常気象について次のような文をまとめた。

I 今春の野菜はなぜ高かったか

1. 野菜不足・高値農作物被害の報

㊦ ダイコン・ニンジン・ホウレンソウ類の品不足は干ばつの後遺症でほぼ予想した通りだが、見通しを狂わしたのは9月下旬からの長雨、このために茨城県下を中心にハクサイの軟腐病が多発(50. 10. 22、朝日)

㊧ 野菜の値段がジリジリと高値を続ける。軒並み5～10割高。原因、昨年、野菜が暴落したため農家が作付けを手びかえた。昨夏から秋にかけての異常高温で定植がおくれた。10月上旬の集中豪雨が響いた。レタス、キャベツなどの場合には昨年夏から秋にかけての高温干ばつのため種まきの時期に被害が出、各農家が作付けを遅らせたことや、10月7日の県西部を中心におそった集中豪雨がひびき全般に品薄となった。(51. 1. 15、毎日)

㊨ 榛南のダイコン天気続きでピンチ、駿河湾沿岸のダイコン畑150haは昨年12月9日に27.5mmの雨があってよりその後はほとんど降っていない。湿度も毎日40%台、しかも名物のカラッ風が吹いて砂地の大根畑は乾き切ってしまった。農家の人たちは水かけに懸命……(50. 1. 17、朝日)

㊩ 静岡県農林水産部最近の県下の干ばつと寒波による農作物の被害状況を発表。伊豆地方のマーガレット栽培面積27ha中20haが半分は全滅で、花や葉が黒く変色。ミカン・茶の幼木園では葉がちぢれる萎縮現象が見られはじめた。野菜の生育も雨が降らないことが致命傷。冬期まき付け可能なホウレンソウ・葉ネギ・タカ菜・時ナンダイコンなども土壌が乾燥し切っているので、全く種子をまけない。これら干ばつ・寒害の中で被害の一番大きいのはレタス・キャベツ・白菜・ダイコンなどの野菜類、いずれも玉伸びなどの生育状況が最低で平年作にくらべて20～30%の減収の予想、特に本県レタスの主産地である森町・吉田町のレタスは平年比60%の減収が予想されている。この被害によって野菜類の値段は強い上昇傾向を示しており、今月中旬の東京市場における野菜卸売価格は、キャベツ、レタス前年比、4倍。ダイコン前年比、3倍と高騰している。(51. 1. 27、静岡)

㊪ 東京神田市場、野菜総入荷量1,199t(数日間の平均)、入荷量は例年より17%少ない1,000t(4月9日)、キャベツ32%減(前年比)、キュウリ・トマト・ピーマン10～27%減(同)、標準小売価格(キロ当)、キャベツ308円(前年同期79円)、タマネギ204円(同77円)、ダイコン163

* 静岡女子商業高等学校

円（同 80 円）、ニンジン 244 円（同 124 円）……（ 51. 4. 10、読売）

㊦ 4 月 15 日の静岡卸売市場の野菜総入荷量は 195 t、ここ数日の平均入荷量は例年より 15～20 % 少ない 230～250 t、キャベツ 23 % 減（前年比）、白菜 25 % 減（同）、キャベツの卸値は 420 円（キロ当、前年同期 115 円）、白菜 350 円（前年同期の 2 倍）（ 51. 4. 16、毎日）

4 月 19 日の静岡県内野菜のバカ値、ダイコン 1 本 250 円、キャベツ 1 個 300～500 円、ハクサイ 1 個 300 円……（ 51. 4. 20、朝日）

2. 原因の追求

上記のような野菜不足・高値は庶民の生活に大きな影響を与えた。この野菜不足の原因については 1 の(ロ)などに述べられているように、昨年 9 月の異常高温、10 月初旬の集中豪雨、12 月 10 日～2 月 4 日まで 57 日間の干ばつ、1 月 21 日～1 月 25 日の寒波、春の多雨と低温などである。次にこれらの異常気象について、その実状を調べてみよう。

a 昭和 50 年 9 月の異常高温と干ばつ

昨年 9 月の異常高温を東京、静岡の気温によってみることにする（毎日新聞の気温表による）。

図 1 によれば最高気温が 30℃ 以上の日、即ち真夏日は東京では 14 日をのぞいて 22 日まで 21 日間、静岡では 3 日、10 日、15 日、18 日、19 日、20 日をのぞいて 22 日まで 16 日間続き東京では気象観測史上の記録を更新し、9 月の最高気温の月平均は 29.6℃ で平年より 2.6℃ 高く（観測史上 2 位の残暑の記録）、静岡でも 9 月の平均気温の月平均は 25.1℃ で史上 2 位の記録であった。

この異常高温の続いた間、雨は 8 月 23 日の台風 6 号の豪雨以来 25 日ぶりに 17 日夜から 18 日にかけて強い雨が降り 18 日午前 7 時までに静岡 14 mm、三島で 13 mm を記録した（8/23～9/15 連続 23 日間雨量 0.5 mm 以下は静岡地方気象台開設以来の記録）。また、9 月は晴の日が多く、日照時間も多かった。東京 192.7 時間（史上 3 位）、静岡 224.1 時間（史上 1 位）、御前崎 249.5（史上 1 位）であった。この異常高温と干ばつは太平洋高気圧が根強く居座ったために起った。しかし、このあとは雨の日が多かった。

b 10 月上旬の大雨（発達した低気圧による）

10 月 7 日夜半から 8 日にかけて遠州・南伊豆地方を中心に集中豪雨が降った。8 日 9 時までの雨量は静岡 143 mm、島田 197 mm、伊豆稲取 215 mm、天城山 183 mm、土肥 193 mm、網代 123 mm、御殿場 91 mm、三島 64 mm であった。特に浜松は 7 日 22～23 時に 52 mm、23～24 時に 73 mm、7 日 22 時 50 分～23 時 50 分に 80.5 mm（開設 1 位の記録）降り、8 日 9 時までに 331 mm を記録した。そして死者 5 人、負傷者 5 人、床上浸水 2,734 戸、床下浸水 10,006 戸の被害を出した。

c 11 月上旬の豪雨（発達した低気圧による）

11 月 6 日から 7 日にかけて静岡県は強い雨と風におそわれた。7 日 9 時までの雨量は天城山 118 mm、御殿場 98 mm、湯ヶ島 98 mm、静岡 70 mm、浜松 43 mm、御前崎 44 mm、三島 44 mm で、7 日 7 時～8 時に宇久須で 29 mm、静岡 27 mm の豪雨となった。また風も強く、瞬間最大風速は御前崎 24.7 m/s（7 日 7 時 10 分）、石廊崎 22.0 m/s（7 日 8 時 40 分）、静岡 15.2 m/s（7 日 8 時 10 分）であった。この風の被害としては 7 日 8 時 10 分頃、東名静岡インターの道路公団の資材倉庫の屋根が飛んで、ランプウェイの観光バスの上に落ち乗客 2 名軽傷、8 時 15 分頃焼津市立東小学校が竜巻におそわれガラス約 30 枚が壊

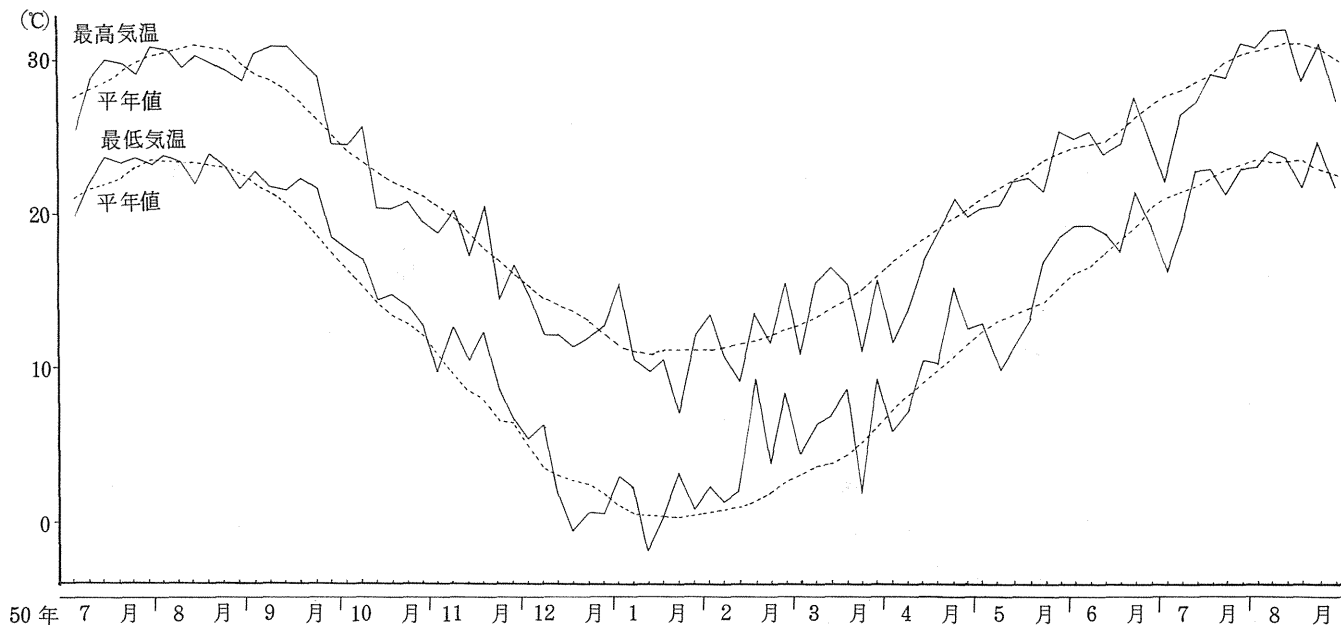


図1 静岡の気温の推移(半旬平均) 昭和50年7月～51年8月

れ、小学生4人がけがをした。

11月は図1をみてもわかるように気温が平年よりも高く、雨量が多かった。東京の11月の平均気温は12.7℃(平年より1℃高い)で11月としては史上4位で、最高気温は16.2℃(平年より0.2℃低い)、最低気温は9.2℃(平年より2℃高く、11月としては史上1位)であった。雨量も245mm(平年96mm)を記録し、逆に日照時間は短かく124時間で平年を23時間下廻り、日照率も40%(平年48%)で史上3位で戦後最低を記録した。

d 師走の長雨、12月5日から9日まで降りっぱなし

この5日間連続の雨のためにミカンの取入れが遅れ、10日以降の冷え込みでミカンは凍霜害を受け、その被害面積は県下栽培面積の40%にあたる6,500haに及び、被害金額は30億円にものぼった。雨は5日14～15時の間に下田に62.5mm(下田土木事務所調)降り、国道135号線で土砂崩れがあった。

e 静岡57日間雨量ゼロ(図2参照)

師走の長雨のあと静岡など太平洋岸では晴天が続き、異常乾燥が2月4日まで続いた。そして静岡県内でも農作物、特に冬野菜、茶、ミカンの幼木、花卉などに多くの被害が発生した(ロ、ハの項参照)。また、火災や山林火災が所々に多く発生した。その主なものは、1月2日～3日岩手県三陸町(焼失面積山林400ha)、3日釜石市(商店20棟、山林240ha)、10日熱海市(焼失面積山林20ha)、11日東京都内で41件の火災発生、2,125㎡を焼き5人が重軽傷、神奈川県で小学校全焼、15日袋井市(焼失面積山林40ha)、20日東伊豆町(同山林10数ha)、23日戸田村(同山林5ha)、2月1日熱海市(同山林2ha)である。

また異常乾燥のため、1月下旬になると、水枯れでミカンの缶詰工場が操業を短縮したり、静岡市内の防火用井戸555カ所中300カ所が使用不能となった。また、安倍川も減水し、静清工業用水も必要量7万tのうち、5万8千tしか取水できなくなった。

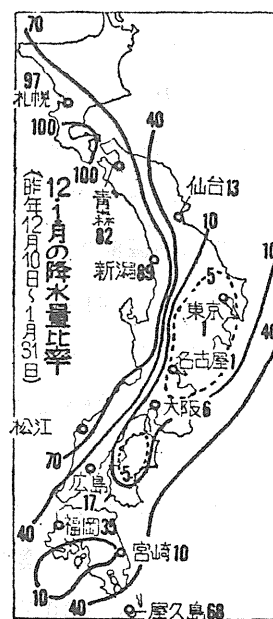


図2(毎日)

f 寒波、主として静岡県内

図1をみると12月中旬と1月20日前後に平年値よりはるかに低温の期間がみられる。12月中旬の寒波についてはd項でふれたように、ミカンに凍霜害を与えた。1月の大寒をはさんでの1週間は気温が低く(19日～25日)、この期間の静岡での最高気温の最も低いのは23日で4.7℃(平年11.3℃)

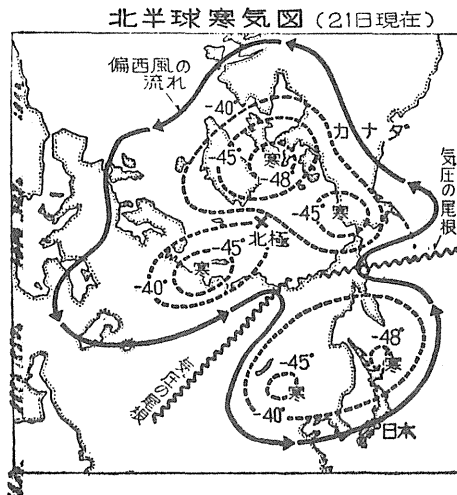


図3(朝日) 50.1.21

最低気温の最も低かったのは24日の-5.5℃(平年0.3℃)で、次いで23日の-4.1℃である。これら2度の寒波の間の期間に当る年末年始は暖く、また、大寒の寒波以後、3月中旬頃までは暖かい日が多かった。彼岸に入ると寒波が来て、20日には東京でも小雪がちらついた。4月上旬には再び寒波がおそい、1日、4日、9日と御殿場では雪が降り、9日には数cm積った。東京の4月上旬の平均最高気温は12.1℃(平年比、-4.7℃で史上2位の低い記録)で、日照時間0の日が1、3、4、9日と4日間あり、日照時間の合計が30時間と平年の半分しかなかった。これは北高型の気圧配置が続いたためで

ある。なお4月上旬の平均気温は大阪14.3℃、札幌5.2℃、福岡15.7℃で3月下旬なみであった。

g 春の多雨

2月28日夕から29日夕にかけて静岡県に大雨が降り、国道2路線7カ所、県道17路線22カ所不通という被害をだした。雨量は秋葉ダム301mm、本川根229mm、湯ヶ島176mm、浜松72mm、静岡70mm、御殿場166mmであった。彼岸後の3月29日から30日まで県下に大雨が降り、東伊豆町や天竜市で山崩れ、土砂崩れが発生した。この雨量は、30日15時までに天城湯ヶ島167mm、御殿場148mm、本川根140mm、静岡124mm、島田119mm、天竜117mmであった。

4月の雨の日は東京でバラバラの雨の日を含めると実に23日となり、月間の日照時間120時間と平年の $\frac{2}{3}$ (史上2位の最少記録)、館山も135.4時間、御前崎も116.7時間で観測史上第1位の最少の記録をしたが、青森は255時間と史上最長の記録をした。

この春の多雨の現象は太平洋高気圧がこの冬以来記録的に強く、このため日本付近は前線帯となりやすかったことが原因である。¹⁾

II 茶摘み直前をおそったヒョウ……5月8、9日、被害はミカンや苗代にも

① 5月8日14時頃発雷、15時頃から雷雨、岡部町北部山間部を中心に直径1cmのヒョウが降り、岡部町の被害面積148ha(金額にして1,828万円)。

② 5月8日19時すぎから20分間島田地方に降ヒョウ、被害面積、島田市上伊太20ha、藤枝市蔵田3ha。

共に茶の新芽が5～10cmにのびて摘み取り直前のヒョウで、芽先が吹き飛んだり、葉のシンの部分だけ残り、やわらかい葉の部分がむしりとられた。

③ 5月9日14時30分～15時30分の間に富士山の中腹に降雪(雷雲通過)

④ 5月9日18時30分～19時の間に焼津市、岡部町の高草山周辺に直径2cmのヒョウが降る。

被害面積、焼津市高草山 43 ha、静岡市逆川 52 ha。

これらの現象は熱雷によるもので日本の上空 5,500 m 付近に流入していた -24 ~ -25℃ の寒気団の影響によるものである。

Ⅲ 長い梅雨 — 低温と日照不足 — 冷害・集中豪雨

静岡のツユ入りは 6 月 5 日、明けは 7 月 21 日、ツユの期間 47 日。

1. 農作物に被害の報、野生動物への影響の報

- ① ミカン・茶に病気多発 県下、長雨低温響く。(51. 7. 2 静岡)
- ② 北海道・東北に霜害 7 月寒波が大暴れ 畑作物一夜で枯死も。(51. 7. 3 朝日)
- ③ 夏野菜に大打撃 冷害 岩手の被害 4 億円を超す。(51. 7. 5 毎日)
- ④ ツユ寒にお手上げ 野菜ジリジリ高値、アイスクリームさっぱり。(51. 7. 6 日経)
- ⑤ ヒョウ、農作物に大打撃 埼玉など総額 22 億円。(51. 7. 20 読売)
- ⑥ お米ピンチ 頼みは残暑 出穂遅れ イモチ発生 青森・秋田悲鳴 (51. 8. 11 読売)
- ⑦ 東北地方低温に泣く 稲の出穂遅れ不作の恐れ (51. 8. 16 静岡、朝日、日経)
- ⑧ 冷夏野菜を直撃 入荷もぐっと減る。(51. 8. 18 読売)
- ⑨ ミカン 9 年ぶりに不作 異常気象に樹勢が衰弱。(51. 8. 25 毎日)
- ⑩ 冷夏追ってもう秋の気配 ついに青刈り 40 年来の低温・日照不足 岩手県山間部 (8. 30 毎日)
- ⑪ おや、もう夏はこないの アキアカネすいすい 目白に大群 低温で感覚狂うて (7. 7 朝日)
- ⑫ 傷心の上高地 マガモのヒナ姿なし 明神池異常低温ふ化せず。(8. 30 毎日)

2. 長雨と低温の実態

5 月 25 日に台風 6 号が北上して前線の活発化、太平洋岸に大雨、県下も大雨注意報がでて、引佐町霧山で 91 mm、浜松市 69 mm、静岡市 62 mm、三島市 30 mm (25 日 0 時 ~ 15 時) の降雨があり、落石や土砂崩れで道路 18 カ所不通の被害をだした (走りツユ)。

5 月 26 日にも県下にも大雨注意報がでて本川根町で時間雨量 42 mm を記録した。

6 月 5 日、静岡県もツユ入り (平年より 6 日早い)。大雨注意報で。4 日 ~ 5 日 17 時までの雨量、天城山 102 mm、御前崎 86 mm、石廊崎 79 mm、静岡 42 mm、浜松 55 mm、網代 53 mm、で下田市では 5 日 8 時 ~ 18 時に 114 mm 降り、午後は時間雨量 20 mm の雨が降って河津町の国道 135 号線で山崩れが発生した。

6 月 9 日、県下に強風・波浪・大雨注意報で。9 日 9 時までの雨量、高根山 24 mm、御殿場 22 mm、佐久間・本川根 11 mm、であった。

6 月 13 日、富士山頂降雪 積雪量 20 ~ 30 cm。

6 月 15 日、県下早朝に雷、浜松 3,400 戸、掛川・袋井 90 戸、静岡 60 戸、清水 18 戸停電。

6 月 24 日、県下に大雨強風波浪濃霧注意報で。24 日 22 時までの雨量、御殿場 225 mm、天城山 199 mm、本川根町 96 mm、静岡 61 mm、浜松 31 mm。静岡瞬間最大風速 19.5 m/s (24 日 10 時 40 分)。

6 月 25 日、県下に大雨注意報で。24 日降りはじめから 25 日 8 時までの雨量は御殿場 271 mm、天城山 230 mm、静岡 90 mm、浜松 60 mm。

6 月 26 日、県下に大雨注意報 (3 日連続) である。24 日降りはじめから 26 日 10 時までの雨量は、御殿場 321 mm、稲取 180 mm、静岡 107 mm、本川根 198 mm、浜松 99 mm。26 日 0 時 ~ 9 時までに石廊崎 66

mm、稲取 57 mm、湯ヶ島 51 mm。

7月1日、東日本各地で異常低温、各地の最低気温 盛岡 4.3℃（平年比 -11.6℃）、宮古 4.9℃、八戸 5.0℃、青森 6.5℃（同 -8.5℃）、山形 6.7℃（同 -11.4℃）、新庄 7.6℃（開設1位）。

岩手県北部の玉山村薮川では最低気温が -2.2℃で氷が張り、晩霜で葉タバコやアズキが全滅した。岩手県の降霜の被害面積 2,110 ha（被害額 4億7千4百万円）（図5参照）

静岡県下の最低気温 静岡 16.1℃（平年比 -4.8℃、開設1位）、御殿場 11.3℃。

7月2日、異常低温、八王寺最低気温 10.5℃（平年比 -8.9℃）、県下最低気温 御殿場 9.8℃、三島 11.6℃、静岡 16.1℃、浜松 16.1℃、御前崎 17.8℃。

7月3日～8日 富士山頂に降雪、積雪量、5日 2 cm、6日 1 cm、7日 2～3 cm、8日 3～8 cm。

7月11日 静岡県下到大雨警報、洪水・雷雨注意報で。伊豆南部に豪雨、10日降りをはじめから12日7時までの雨量は天城山 510 mm、湯ヶ島 417 mm、石廊崎 271 mm、土肥 229 mm、掛川 228 mm、天竜 196 mm であった。東伊豆町稲取では11日10～11時に 69 mm、11～12時に 64 mm、12～13時に 53 mmの雨が降り、掛川では11日9～10時に 50 mmの雨が降った。この豪雨のため伊豆半島を南北に結ぶ伊豆急、国道135号線、国道136号線、県道修善寺下田線などが崖崩れのために不通となり、折柄の日曜日の観光客数千人が足止めされ、県のチャーター船や護衛艦で熱海に運ばれた。被害（12日17時現在 県警調）死者12人、行方不明3人、負傷者13人、家屋全半壊21戸、床上浸水2,839戸、床下浸水4,434戸、道路損壊90カ所、山・がけ崩れ221カ所、橋流失10カ所、田畑冠水870 ha、被害総額（公共施設など）約52億円。（雨量分布図、図6参照）

7月18日、仙台管区气象台、北日本に異常低温情報をだす。栃木・茨城県に竜巻・降ヒョウ。

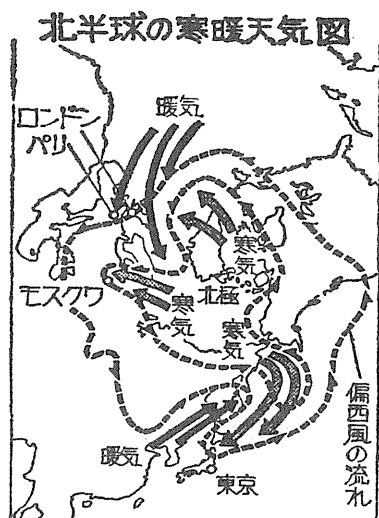


図4（毎日） 6月末

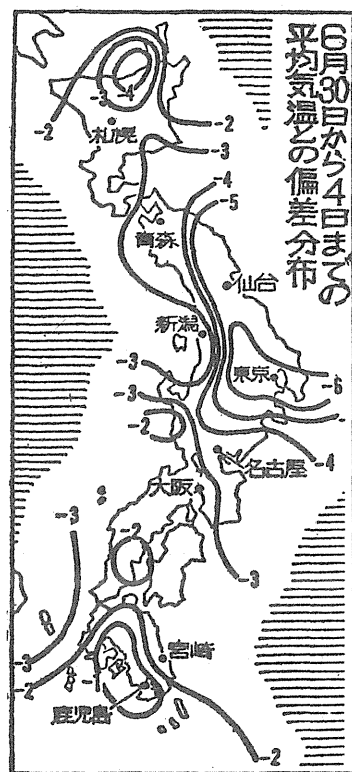


図5（読売）1976

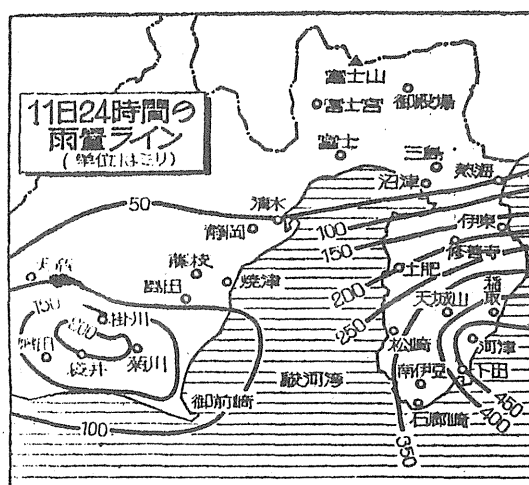


図6（読売）7月11日

7月19日、県下に大雨警報でる。降りをはじめから19日16時までの雨量は越木平（春野町）83 mm、大山（島田市）23 mm、高根山（藤枝市）21 mm、御殿場32 mm、天城山12 mm、稲取8 mm。北関東から信越にかけてヒョウが降り、農作物の被害は22億円、埼玉で1人死亡、7人負傷、ヒョウの直径1～3 cm 15分間降る。長野のヒョウの大きさは大豆大から親指大、15分間降る。

7月21日、九州南部・中国・近畿・東海・北陸ツユ明け。静岡は平年より6日おそくツユ明けでこの期間の雨量は548 mm。梅雨前線が太平洋岸で消滅してツユ明けとなった。

8月5～6日、山形・宮城・新潟北部に豪雨、6日15時までの雨量、山形84 mm、尾花沢150 mm、大江町（山形）199 mm、塩釜124 mm、宮城町148 mm、新潟124 mm。

8月9～10日 県下に大雨洪水注意報、降りをはじめから10日9時までの雨量、富士251 mm、御殿場203 mm、佐久間214 mm、本川根228 mm、天城山134 mm、静岡110 mm。御殿場9日17時～19時の2時間雨量138 mm、富士市吉原9日18～19時の時間雨量62 mm。新幹線由比付近の時間雨量74 mmのため徐行。県東部で中小河川がはんらんした。沼津市大岡池之尻の黄瀬川は危険水位（3 m 96 cm）を突破し5 m 60 cmに達し、16カ所でははんらん決壊した。また、富士市内の赤淵川、須津川、和田川の堤防が決壊した。この豪雨の被害（県警調）負傷4人、全半壊家屋19戸、床上浸水758戸、床下浸水2,864戸、田畑流失埋没74 ha、道路損壊153カ所、堤防決壊5カ所、がけ崩れ24カ所。この日新潟県にも前線による豪雨があった。

8月13～14日、新潟・富山・福島に集中豪雨、北陸・信越線不通、新潟県寺泊150 mm、糸魚川144 mm、三条130 mm、長岡93 mm（14日15時までの雨量）

8月14日 気象庁予報部、北日本の低温と悪天に関する情報をだす。“ここ数日北海道では気温が低く、また東北・北陸でも低温と悪天による日照不足が続く見込み……”

8月16日、気象庁、大雨情報をだす。“北陸から東北南部にかけてきょう一日再び大雨の恐れがある。”仙台管区气象台、低温と日照不足に関する情報をだす。“東北地方は残暑が一時的にもどることがあっても長続きは期待できない。”と。

8月前半15日間の平均気温

盛岡20.8℃（平年比-3.0℃）、福島22.6℃（同-3.0℃）、仙台22.2℃（同-2.2℃）、秋田22.3℃（同-2.3℃）、青森21.1℃（同-1.9℃）

8月前半15日間の日照時間

盛岡43.7時間（平年の45%）、秋田36時間（同55%）、山形平年の56%、東京74時間（平年比-27%）。山形の8月上旬の雨量平年の3.14倍。

8月15日現在の稲作の状況

岩手は出穂が10日前後おれ、青森・宮城では出穂しない水田が約30%ある。秋田では草丈が1割ほど短かく茎数が1割多い冷害型、山形は出た穂が全部実のる安全圏の8月12日をすぎても出穂しない山間部の水稻がある。更に岩手では葉イモチ病が作付けの $\frac{1}{4}$ の23,600 ha、山形でも40,000 haが被害を受けている。

そこで被害の大きい岩手県の盛岡市の本年の6月～8月の気温の移り変りを第7図に示した。これによれば7月初旬に10℃以下となったあとも最低気温は平年以下の期間割合多くなっている。また、最高

気温は6月～8月間の18半旬中、平年以上の半旬はわずか4半旬で、8月になってからは全部平年以下である。そこで過去の凶作年と気温²⁾の比較をしたのが第1表である。これによれば昭和9、10年とほぼ似たような気温の推移である。

表1 盛岡における凶作年の気温

	6 月	7 月	8 月
昭和51年の平均気温	18.2 (18.1)	21.4 (22.5)	20.5 (23.9)
昭和9年の平均気温	18.0 (17.0)	19.6 (21.9)	20.8 (23.2)
昭和10年の平均気温	17.2 (17.0)	20.7 (21.9)	20.8 (23.2)

() 内は平年 昭和9、10年の平年値は大正13～昭和8年

表2 大凶作年の夏季の気温及び日照と水稻収量との関係

		明治35年	明治38年	大正2年	平 年
平均 気温	7 月	18.9	21.2	19.7	21.3
	8 月	20.3	19.7	20.8	23.2
平均 日照	7 月	25%	38%	26%	33%
	8 月	26	25	46	46
玄米反当収量		0.84石	0.70	0.93	1.29

気温及び日照は東北6県各測候所観測値、収量は6県の平均

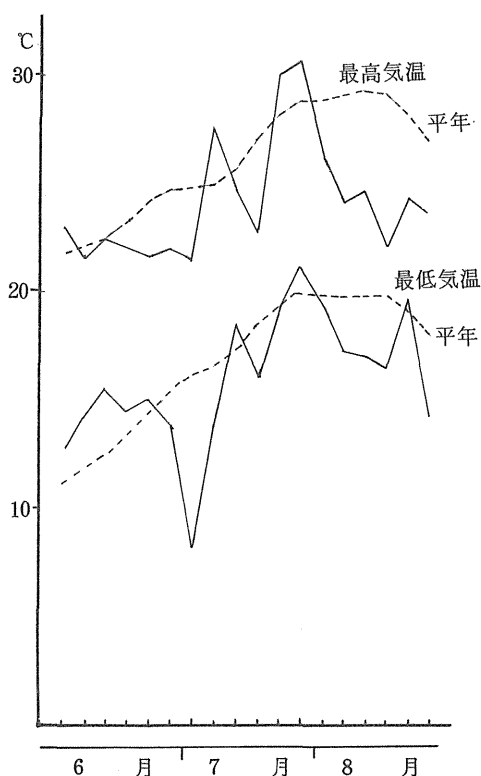


図7 盛岡の気温の変遷
(昭和51年6～8月半旬平均)

東北は気象観測が行なわれる様になってから6回の大凶作に見舞われた。明治35年、38年、大正2年、昭和6年、9年および16年³⁾であって、これらの年はいずれも夏の気温が特別低く、凶作は皆、冷害によるものである。

明治35年、38年、大正2年の気温・日照と水稻収量の関係を示したのが第2表である。これによれば日照不足から生じる気温の低下が減収の一大原因となることが明らかに示されている。

3. 原 因

6月からの地上天気図をみると東日本がオホーツク海高気圧におおわれている日が多く、特に6月下旬から7月上旬には発達したオホーツク海高気圧におおわれ、東北地方の東岸

に「ヤマセ」が吹いて異常低温をつくりだした。第4図によれば偏西風の流れは日本付近で大きく南にくだり、日本付近に北極の寒気団からの寒気が入りやすい状態になっており、その影響でオホーツク海高気圧が発達し、南下したところへ、台風7、8号が本州南方海上を北東進したので日本の北東海上からの寒気の流入が続いた。この結果、冷害が起った。

(51. 9. 10)

引 用 文 献(新聞以外のもの)

- 1) 久保木光熙 寒暖の大きい春の天候気象 76 - 6
気象協会 P 22 1976
- 2) 野口 弥吉 栽培原論 P 173 養賢堂 1947
- 3) 春田 稔 東北の冷害と長期予報 気象百年史資料編
P 227 気象学会 1975